

いのである（付随は軽視の意味ではない）。したがって、「社会」の領域で考える内容は、多くが他の活動に付随して行なわれるものであり、「部まとまった活動を行なうものについても、常に他領域との総合的な活動となるのが一般原則でなければならぬ」。例えば、「仕事をくふうしてする」といった内容は、それ自体の活動ではなくて、「絵画製作」その他の内容を中心とする活動に付随して指導すべきものであり、「売屋ごっこ」のような活動は、「自然」「言語」「絵画製作」などとの関連において、総合的に考えるべきものである。

一般的に言って、「社会」の指導はうまく行なわれていない。それは、この領域のもつ右のような特徴からきている（付随的に

指導すべきものが多い）ことと、「社会性」へのせつかちな態度からきていることによると思う。

最後に、幼児の社会性といわれるものは、まだその「芽」に過ぎない。真の社会性は、八才ころ（小学校三年ころ）以後をまたなければできてこない。先日ある幼稚園の「自由遊び」を見せてもらったが、四才児では「仲よく一人ひとり遊んでいる」という状態ではない。このことを正しく認識し、集団の中の「個性」を育てるということを忘れないで、あせらずに「芽」をたいせつに扱いたいものである。せつかくの「芽」を摘み取ってはならない。

（島根県教育庁指導主事）

温かくしかもキリツとした保育者の姿勢



堀 内 康 人

広い目で見て、小学校などになりますと、こちらの小学校とあちらの小学校とで行なわれている教員の仕方や内容に著しい違い

がある、などということは、余りお目にかかる機会はないのですが、それが幼稚園や保育園になりますと、ひとときわ日だっどこ

るか、月とスポンの違いのようなものを、私共はしばしば経験させられ、これではまだまだだなあという極めて複雑な気持ち、たくさんがあります。幼児時代の教育で一番大切だといわれ、またそうだと思う基本的生活習慣の樹立などという事が口やかましくいわれながら、具体的には、「これではとてもそうした生活習慣の樹立ができるはずがないではないか」と大声をあげて叫びたくなるような保育環境で保育が行なわれているような例がたくさんあります。

まずこんな基本問題から考えていかねばならないと思います。が、ここではそうした問題はいわずもがな、のこととして、幼稚園や保育園の教育内容としての社会、その中でどんな事を一番強調したいかについて、思いつくままに述べてみましょう。

その前に私は常々考えているのですが、幼児の教育にたずさわっている人の中には、自分の仕事を、幼児の生活活動のアシスタントか、もっと悪くいえばセクレタリーぐらいにしか考えていないような人が、まだまだたくさんおられるような気がするので。これでは話しになりません。こんな先生はいつも「こちよこちよこと、こまめに幼児の活動の尻拭いはやります、幼児の活動を指導することはできません。先生たちは申します、幼児の自主的活動を尊重しなければならぬ」と、全く馬鹿の一ツおぼえとはこのことではないでしょうか。子どもたちが二、三名でたいへん積極的に

積木遊びをしています。そこへ疾風の如く例の○○君がチン入して来て、傍若無人にせっかくできたお船をメチャメチャにけちらかして行こうとします。そんな時に「あらいけませんね」などという事でこまかしの教育をやっている人を間々見ることがあります。ことが適切かどうか知りませんが、「温かくてしかもキリッとした姿勢」をもっと多くの先生方に持ってもらわねばなどという気持ちになります。子どもたちは本来活発そのものであることもよくわかっています。しかしそうだからといって、人の迷惑も考えないで、人がたいへん悲しい気持ちになるのかもかえりみず、ついつい活発にかきまわってしまった、そんな事がいつも放置されているようなしまりのない保育を見ることがありますが、こんな現場に出つくわすと、見ている方でスポンのベルトをギュッと一にぎりほど固くしめたくなります。保育室の中では誰ひとりとして大声でガナリタテズ、みんなの瞳がきらきらと輝き、手足が活発に動き、あちらでもこちらでもほほえましいお仕事を展開し、相談と子どもらしい理解が成立し、それにもとづいて可愛らしい協力、それが時には驚くほどの、或いはおとなたちをしてあつといわせるような成果をあげるような場面へと発展する、保育室からお庭へ出た子どもは思いっきり伸びのびと自由活発に大声をあげて走り廻る、私はこういつたけじめのある教育をしたいと思えます。

こんなことで大体おわかりかと思いますが、子どもたちに幼稚園や保育園で豊かな中味のある生活経験をたくさんさせるには、集団生活なので、どうしても最初から徐々に、子どもの年令に応じた生活のけじめ（規律）を与える事が大切です。お部屋の中や廊下では走らない、お友だちのやっている事を邪魔しない、机の上にはのらない、上靴のまま外へ飛び出さない、まだその他いろいろな事がありましようが、どうしたとりきめ、お約束をさしよのうちにはきちんとつけておかないと、一年中同じ注意を繰り返すだけでなく、そうした事によって子どもたちの生活経験がいつも歪められてしまいます。秋や冬になってもまだ「机の上のつてはだめです」などとヒステリックな声を出して注意しないでも済むようにしたいものです。

次の段階ではなにを強調したいかといいますと、子どもたちが自分たちで、共通の課題を、協力して見事に解決して行く場面の適切な指導、それにもとづいて、どの子どもでもみな生き生きと、あらゆる種類の活動に入っていけるような指導を大切にしたいと思います。

こうした指導は、保育者が子どもの個々にわたっての性格的特徴、興味や関心そして理解の程度、なにがどの程度までなされておき、なにがまだやり残されているかなどについての正しい認識がないと、とてもできないことです。「誰それちゃんはあるをや

ってしまつて下さい、誰君はこちら、誰君は誰君を呼んできてちょうだい」といった保育者のさばき方の、おたおたしないで明解なやり方は、子どもたちに実に見事に反映します。行動的で、やることにもむだがなく、何事も親切に、根気よくまとめていこうとする努力、そういうものを幼児時代からしっかり身につけさせるようにするためには、まず保育者がそうしたやり方の模範を示さねばなりませんし、それには、ここでもまた温かく、きりつとしたことばの所有者にならないとだめだと思います。子どもたちはそうした働きかけを繰り返しているうちにさまざま人間関係や事物現象間の関係把握をそつなくできるように発達するのだと思います。

保育内容としての社会では子どもたちを取り巻く人間や社会の諸事実の間の関係把握を頭の中でも行動の上でも正しくする事ができるように導びてやる事だと思ひます。 (東京家政大学)

日本幼稚園
協会主催 幼児教育講習会 (予告)

期日 昭和三十八年七月二十二日(月)〜二十五日(木)

会場 昭和三十八年七月二十二日(月)〜二十五日(木)
お茶の水女子大学講堂

第一部 (午前) 幼児教育の内容、幼児期と人間形成、日

本の児童福祉など

第二部 (午後) 幼児の創造性を培うあそび

—— 詳細は次号に発表いたします ——